



NEWS LETTER

Center for Promotion of Educational Innovation,
SHIBaura INSTITUTE OF TECHNOLOGY

2019.10
VOL. 11

CONTENTS

2

2019年度 FD・SD講演会

「高等教育の課題と芝浦工業大学への期待
～社会に支持され続ける大学を目指して～」

教育イノベーション推進センター FD・SD推進部門 部門長
榊原 暢久

2018年度優秀教育教員顕彰について

2018年度優秀教育教員選考委員会委員長
鈴木 徹也
(システム理工学部 電子情報システム学科)

3

高等教育開発セミナー

「ティーチング・ステートメント作成とその運用」

教育イノベーション推進センター FD・SD推進部門 部門長
榊原 暢久

カリキュラムコーディネーター

養成研修会(初級編)に参加して

豊洲学事部 学生課
久保 ひとみ

4-5

授業における創意工夫

システム理工学部環境システム学科
中口 毅博・作山 康・澤田 英行・増田 幸宏

6

SGU事業進捗状況報告

国際部部長
杉山 修

7

実験・実習の授業設計WS(生命・化学系)

研修担当講師 教育イノベーション推進センター FD・SD部門員
奥田 宏志

英語による授業のためのWS

研修担当講師 教育イノベーション推進センター FD・SD部門員
恒安 眞佐

8

2019年度 理工学共同利用拠点実施プログラム一覧

2019年度 IR部門の活動方針

教育イノベーション推進センター IR部門長

長谷川 忠大

2019年度のIR部門の活動方針が、2019年5月に行われた第1回IR部門会議にて、次のように承認されました。

- 1) 学修支援環境 (Scomb, Learning Management System (LMS)、SITポートフォリオ(ダッシュボード、ショーケース)、SITbot (LINEアプリ)) の利用率の向上、
- 2) 学生の「振り返り」スキームの構築 (SITポートフォリオに活動記録を蓄積するだけでなく、積極的にこれらを利用して、活動を振り返り改善していくPDCAサイクルの実現)

これらに基づき、現在、2019年度のIR部門の活動が実施されています。

ここで、2019年2月に、文部科学省中央教育審議会大学分科会より、教学マネジメントにおける答申案が示されたことをご存知でしょうか？教学マネジメントとは、大学がその教育目的を達成するために行う管理運営のことであると定義されています[1]。また、その確立に当たっては、学長のリーダーシップの下で、三つの方針(DP, CP, AP)に基づく体系的で組織的な教育の展開、その成果の点検・評価を行い、教育及び学修の質の向上に向けた不断の改善に取り組むことが必要であるとも説明されています。さらに、その概要図の中で、「学修成果の把握・可視化」および「複層的・継続的なPDCAサイクル」などのキーワードが掲げられ、検討するべき方向が理解できます。

一方で、これまでのIR部門ではScombを中心に、LMSやSITポートフォリオなど学修成果の把握および可視化のための環境を整備してきました。2018年度のScombの学生の利用率は100%に近く、教員も80%を超えていました。LMSにおいては、学生の利用率は80%を超えたものの、教員の利用率は60%を下回っていました。さらに、SITポートフォリオの学生の利用率は約80%、教員の利用率は約30%でした。現状の利用率をどのように分析するかとの課題はありますが、これら学修支援環境の利用率を上げることが、学修成果の把握と可視化の推進になり、間接的には学生の振り返り活動の促進に繋がると考えています。さらに、2019年度は活動指針に則り、直接的・積極的な「振り返り」のスキームを2つ試行しております。1) 新入生アンケートにおいて「学生自身の学修目標とキャリアプランの設定」と、2) 大学院生の「研究計画書(兼 研究指導計画書)」で、来年度に振り返り活動を実施して行く予定になっております。さらに、2019年度後期は授業の自己評価アンケートによる振り返りのスキームを実現するべく計画をしています。

これらの活動は、学生はもとより、教職員の方々にはご指導・ご対応・ご助言を頂きながら実施しております。文末になりますが、皆様のご協力に感謝申し上げます。

[1] “教学マネジメントについて(案)”, 教学マネジメント特別委員会 議事要旨・議事録・配付資料、
http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/01/_icsFiles/afieldfile/2019/02/11/1413532_4.pdf
(最終閲覧日 2019/08/27)

学生用 SITポートフォリオ SIT Portfolio for students



2019年度FD・SD講演会

高等教育の課題と芝浦工業大学への期待 ～社会に支持され続ける大学を目指して～

教育イノベーション推進センター FD・SD推進部門 部門長 榎原 暢久



▲基調講演を行う吉武 博通先生

教育イノベーション推進センターFD・SD推進部門の企画で毎年実施しているFD・SD講演会が、2019年3月30日(土)大宮校舎において、本学教職員273名が参加して開催されました。今年度は、本学の外部評価委員で首都大学東京理事・筑波大学名誉教授の吉武博通先生に、「高等教育の課題と芝浦工業大学への期待～社会に支持され続ける大学を目指して～」という演題で基調講演をお願いしました。

日本の大学の認証評価は昨年度から第3サイクルに入り、本学はその初年度に(財)大学基準協会による大学評価(認証評価)を受審し、大学基準に適合していると認定されました。第3サイクルの認証評価では、内部質保証の実質化、そのためのPDCAサイクルの構築、教育マネジメント体制の構築が

一層重視されています。吉武先生からは、日本の高等教育をめぐる現状と課題、社会からの要請、それらに応えていくために必要な「学修成果の可視化」と「組織変革・組織開発」についてお話があり、芝浦工業大学への期待として以下の7つがあげられました。

- 1 改革を先導し続ける大学
- 2 改革成果の可視化と発信(教育改革がいかなる変化をもたらしたか)
- 3 確かな基礎力、文系分野を含めた幅広い興味関心、英語力
- 4 研究力のさらなる強化と大学院の充実
- 5 技術革新とビジネスモデルの変化が加速する産業界との連携深化
- 6 女子学生比率のさらなる向上
- 7 教職協働、業務革新を先導する大学

2018年度優秀教育教員顕彰について

2018年度優秀教育教員選考委員会委員長 鈴木 徹也
(システム理工学部 電子情報システム学科)

による受賞理由の説明により教育賞の意義が明確になった」「1・2年生への研究の動機付けを行う取り組みが素晴らしい」といった趣旨の肯定的な意見が多くありました。改善点については「教育改善の資料としてこれまでのものを含めて配布資料を閲覧できると良い」「ガイダンスなどの学生対応で忙しいため日程を再検討してほしい」といった趣旨の意見がありました。



■2018年度優秀教育教員 受賞者

所属学部	氏名・所属学科	標題
工学部	遠藤 玲 (土木工学科)	専門科目「都市の計画」必修科目におけるアクティブラーニングの実践と改善
工学部	菅谷 みどり (情報工学科) 谷田川 ルミ (工学部共通学群) 杉本 徹 (情報工学科) 中島 毅 (情報工学科) 井尻 敬 (情報工学科)	専門科目「プログラミング入門1」におけるロボットPBLの実施と評価
システム理工学部	飯塚 浩二郎 (機械制御システム学科)	衛星設計コンテストを通した宇宙工学の実践的教育
システム理工学部	環境システム学科教員全員	SDGs達成をめざすカリキュラムの構築とアクティブラーニングの展開
デザイン工学部	櫻木 新 (デザイン工学科) 佐々木 毅 (デザイン工学科) 橋田 規子 (デザイン工学科) 前田 英寿 (建築学部 建築学科) 梁 元碩 (デザイン工学科)	デザイン工学部におけるグローバルPBL
建築学部	ホートン広瀬恵美子 (建築学科)	建築系学生の英語教育に特化した英語教科書の開発
工学マネジメント研究科	林 隆一 (工学マネジメント研究科)	実践的な技術経営教育を推進する芝浦ビジネスモデルコンペティションによる教育改善活動
理工学研究科	ミリアラ ムラリダ (国際理工学専攻)	Smart activities for educational development: (i) International High School Internship Program, (ii) Short-Term Internship, Departmental visit and Engineering English Program, (iii) gPBL-SIT/IITM etc.

高等教育開発セミナー 「ティーチング・ステートメント作成とその運用」

教育イノベーション推進センター
FD・SD推進部門 部門長
榎原 暢久

東京大学・大学総合教育研究センターの栗田佳代子先生と吉田壘先生にお願いし、標記セミナーを2019年5月18日(土)に豊洲校舎で実施しました。ティーチング・ポートフォリオ(TP)の完成には通常2日半を要しますが、TPチャートを事前課題として作成済みであれば、ティーチング・ステートメント(TS)は1日足らずで作成できます。TSは、TPと同じく教育活動を振り返り、また、それを文書化しますので、教育改善及び教育業績評価資料として用いることができます。今回のセミナーでは、事前に作成したTPチャートをもとに参加者各自がTSを作成し、TSを各機関に導入す



る際の留意点についても共有しました。

昨年度から私立大学等改革総合支援事業の設問にTPが含まれたことで、各大学はTP導入に向けた議論を進めています。本セミナーの参加者も、多くが私立大学の教職員の方々でした。本学では、2010年からTPWSを開催しており、1泊2日のTP作成WSに加えて、一日かけてTPを完成させるTP完成WSを用意しています。TPを導入する際に留意すべきことの1つに「受け入れと実行に十分な時間をかけること」があります。今回のセミナー受講により、各大学等でのTP導入が意義のあるものとして進められることを願ってやみません。

*TP…自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、様々なエビデンスによってこれらの記述を裏付けた教育業績についての厳選された記録
*TPチャート…教育活動について振り返り、教育理念を見出す1枚のワークシート
*TS…TPチャートを1～2ページの文書にしたもの。構造はTPと同じで、いわばTPの短縮版

カリキュラムコーディネーター養成研修会 〈初級編〉に参加して

豊洲学事部 学生課
久保 ひとみ

カリキュラムコーディネーター養成研修会は「所属組織のカリキュラムを実際に改善できる人材」を育成することを目的としており、今回はその初級編として日本高等教育開発協会と芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの主催により、2019年5月25日(土)、26日(日)に本学芝浦キャンパスで開催されました。カリキュラムコーディネーターは、大学の持続的な教育改善の仕組みを確立していく人材であり、その育成が求められています。このため本研修には、予定人数をはるかに上回る国公私立大学の教職員95名が参加しました。

私自身は、カリキュラム全般を統括実行する職員の立場として参加しました。グループワークでは、他大学の教員の方ともディスカッションし、各々の立場でのカリキュラムへの関わりについて情報を共有しまし

た。また課題の抽出と改善策についても共有しました。各大学ともカリキュラムの議論は縦割り(学部学科ごと)で行われていて、横断的に実施することを今後の課題としています。また教員と職員が一体となり全体で教育改善に取り組むことも課題となっています。今後のカリキュラム改革では、分野・学部を超えた全学的な視点での議論が必要で、それを推進するための教職員の組織設置が喫緊の課題です。



今回の研修を通し職員の立場で実行すべきことが明確になりました。二日間で学び得た内容を実務に活かし教育改善等に邁進したいと考えます。

SDGs達成をめざす カリキュラムの構築とアクティブラーニングの展開

ー環境システム学科の事例ー

システム理工学部環境システム学科

中口毅博 作山康 澤田英行 増田幸宏

1. 背景

国連が2015年にSDGs(持続可能な発展目標)を決議して以降、全世界でSDGsに対する関心が急激に高まっており、政府も「SDGs対策推進本部」を設置して省庁をあげて取り組んでいます。経団連は「企業行動憲章」において、企業理念としてSDGsを取り入れ、取り組み強化を経営者や従業員に求めている、SDGsに取り組むことがスタンダードになりつつあります。

このような背景のもと、環境システム学科はSDGsの達成に寄与する人材育成のため、SDGsを教育の根幹に据えたカリキュラムを2017年度より開始しました。そこで本稿は、SDGs達成をめざすカリキュラムの構築とアクティブラーニングの内容、さらにはその効果について紹介します。

2. 教育方針

環境システム学科は、ディプロマ・ポリシーとして世界のSDGsの達成を明記し、カリキュラム・ポリシーにおいて学科独自の「SDGs」を教育方針として掲げています。また、「 π 型」人材育成をめざし、横棒をインターアクティブな協創活動(D)による分野横断的な問題解決(s)、縦棒をG:グリーンインフラ・エンジニアリング)ともう1つの専門分野(副軸)と、地域国際社会の課題解決に貢献する動機と意欲(S:サービラーニング)と位置づけました(図1)。

図1 π 型スキル開発に向けた「SDGs」¹⁾

3. 教育内容

この方針に沿って2017年度にカリキュラムを大幅に見直し、既存の専門科目もすべて学科独自のSDGsと関連付けました。また「環境システム入門」「環境システム総論」「環境システム応用演習」といった必修科目を導入し、SDGsの達成に寄与しつつ建築・都市・環境の横断的・多面的な課題解決策を提案するアクティブラーニングを取り入れるとともに、環境システム応用演習や卒業研究では、発表資料にSDGs達成への寄与を明記すること、もしくはアイコンの貼付を義務づけました(図2)。

図2 環境システム応用演習における発表会スライド²⁾図3 1年生と3年生の合同授業の様子
(顔が見える方が1年生、背中が3年生)

一方、1年生の「環境システム入門」と3年生の「環境システム総論」を同じ時間帯に開講し、「環境システム学科でSDGsをどう学ぶか」というテーマで3年生が1年生にSDGsの学び方をアドバイスするという合同ワークショップを開催するなど、年代横断型、分野横断型で学ぶ機会を頻繁に取り入れました(図3)。さらに、2年生の「環境フィールド実習」においては、さいたま市、上尾市、三島市、内子町、南三陸町におけるボランティア活動を行うなど、サービラーニング(地域貢献)活動を取り入れた教育を展開しています。

4. 教育効果ーSDGsに関する自己評価

必修授業「環境システム応用演習」(3年後期)、2年生の選択必修授業「環境フィールド実習」「International Field Experience」(2年通年)を受講した学生に対して事前・事後アンケート調査を実施することにより、SDGsに関する知識習得や行動、社会人基礎力(ジェネリックスキル)の教育効果を把握しました。回収数は3年生92、2年生79で、合計延べ171でした。

ここではSDGsに関する自己評価のみ紹介しますと、「知識の習得」「授業内での行動実践」「授業外での行動実践」の3種類について、受講前と比べて身についたと思うSDGs項目(17の目標+学科独自項目4項目の計21項目)をすべて選び番号を記入させた結果、全体では学生があげた平均項目数は「知識の習得」が5.7個、「授業内での行動実践」が4.3個、「授業外での行動実践」が3.1個となったことから、すべての学生に何らかの向上がみられたといえます。項目別に見ると、本学科の専門領域である「11.住環境」に関しては53%の学生が「知識が習得できた」と回答し、72%の学生が「授業中に行動を実践できた」、53%の学生が「授業外で行動を実践できた」と回答したことから、大きな効果が見られたと言えます。この中で「授業中の行動実践」を高い順にみると、「11.住環境」の72%が最も高く、次いで「7.エネルギー」52%、「17.協働」50%、「9.産業・インフラ」38%、「4.教育」36%となりました。

学年別にみると、両学年で回答割合を比較すると特徴が学年ごとの教育の特色が現れています。すなわち、2年次のほうが3種類とも自己評価が高い項目は「食・農」「健康・福祉」「教育」「ジェンダー」「水・衛生」「エネルギー」「人権・平等」「海洋資源」「平和」であり、3年次が高い項目は「産業・インフラ」「住環境」「陸上資源」「協働」「サービラーニング」「デザインシンキング」「グリーンインフラ」「システムシンキング」でした。2年次は幅広いテーマ、3年次は専門領域に焦点を当てた学習の成果が反映されています。

今後もSDGsをキーとして、学生の「主体性、対話的で深い学び」の場や機会を提供していき、地域や国際社会の課題解決に貢献できる人材の育成に努めて参ります。

文 献

- 1) 芝浦工業大学環境システム学科(2019)学科パンフレット。 <https://www.paes.shibaura-it.ac.jp/>
- 2) チーム4 KASHIWAKKA(2019) 来る人も、住む人も、「ハッピー」を感じられるまち。環境システム応用演習発表会資料より
- 3) 中口毅博・作山康・澤田英行・増田幸宏(2019) SDGs達成をめざすカリキュラムの構築とアクティブラーニングの展開ー芝浦工業大学環境システム学科の事例ー。日本環境教育学会関東支部年報13,p.9-14.

SGU事業進捗状況報告

国際部部长
杉山 修

本学は、2014年10月、文部科学省の補助事業である「スーパーグローバル大学創成支援」(SGU事業)に私立理工系大学として唯一採択されました。本学の本補助事業における目的は、「世界に学び、世界に貢献する理工系グローバル人材の育成モデルを構築し、国内外の大学に波及させる」ことです。そのために、①価値共創型教育による実践型技術者の育成、②世界水準の大学制度の実現、③産学官連携コンソーシアム(GTIコンソーシアム)の構築・運営、を目標に掲げ取り組んできました。

上記の定性的な目標と連動する形で、約20項目にわたる定量的な目標を設定しました。その中でも本学が特に力を入れてきたのが、本学学生の海外派遣(アウトバウンド)の拡大、留学生の受入れ(インバウンド)の拡大、学生の語学力の強化です。

アウトバウンドにおいては、グローバルPBLや語学研修プログラムを中心に、2018年度は1,671名の学生を海外へ派遣しました。これはSGU事業が始まる前年2013年度の実に5倍にあたります。そのうちSGUの数値目標となる単位認定を伴う日本人の留学経験者数は1,373名となり、2023年度の最終目標2,700名に向けて順調に推移しています。

インバウンドについても、2018年度は1,490名の留学生が本学で学びました。これは2013年度の9.4倍にあたります。特に英語で授業を履修するプログラムや本学教員の指導の下で研究活動を行なうプログラム、グローバルPBLなどでの受入れが拡大しました。こちらも2023年度の最終目標2,820名に向けて、更に海外へのプロモーションを推進していく予定です。

学生の語学力強化においては、2018年度に本学が目標として設定するCEFR B1レベル以上の学生が2,862名となりました。様々な特別講座や学生のサポート体制を提供し、2013年度の7.6倍まで拡大しました。しかしながら、最終目標の8,115名を達成するには、より一層の工夫と努力が必要な状況です。

また、本事業終了後のあるべき姿も見据え、本学が真のグローバル大学として更なる発展を遂げるために、様々な学内リソースの整備に力を入れています。とりわけ、教育・研究の更なる国際化を図るべく、戦略的に外国籍教員の採用を拡大しています。このリソースを活用し、2020年度には工学部

において英語のみで学士学位を取得できるプログラム(先進国際課程)を立ち上げることが決定しています。

2017年度に大学院理工学研究科、およびシステム理工学部 の3学科で開始した国際プログラムにおいても更なる拡充を図っています。特に後者については、2019年度には新たに2学科も加わり、システム理工学部全学科において国際プログラムを展開しています。このプログラムでは、一学期以上の



▲セタイイベント@グローバルラーニングコモンズ

海外留学や卒業論文の作成・説明を英語で行なうことを必須とし、グローバル理工系人材としての能力を身につけることが期待されています。

海外の協定校の間では、本学の評判が交換留学プログラムに参加した学生による口コミで伝わり、海外協定校一大学当たりにおける留学希望者が増加するという正のスパイラルが出来上がりつつあります。学内における日本人学生と留学生交流の場であるグローバルラーニングコモンズの活動も更に拡充し、数年前までは学内で目立っていた留学生も、今となっては日常の風景となりました。留学生と立ち話をしている日本人学生も見かけます。これらのことこそ、本学のグローバル化が着実に進んでいることを現していると思います。

2018年度 海外派遣プログラム		派遣人数	割合
1	短期語学研修プログラム	519	31%
2	グローバル PBL	849	51%
3	海外インターンシップ(企業)	17	1%
4	交換留学プログラム	34	2%
5	研究指導	201	12%
6	その他(派遣)	51	3%
合計		1,671	100%

2018年度 留学生受入れプログラム		受入人数	割合
1	正規留学(学位取得目的):学部	170	11.4%
2	正規留学(学位取得目的):大学院	147	9.9%
3	科目等履修生	3	0.2%
4	研究生	13	0.9%
5	研究留学	165	11.1%
6	Sandwich Program	154	10.3%
7	グローバルPBL(受入)	562	37.7%
8	Intensive Program:アカデミック	169	11.3%
9	Intensive Program:文化体験	61	4.1%
10	その他(受入)	46	3.1%
総計		1,490	100%

Workshop Report

実験・実習の授業設計
WS(生命・化学系)

(2019年6月15日実施)

研修担当講師
教育イノベーション推進センター
FD・SD部門員

奥田 宏志

(システム理工学部 生命科学科)



理工系大学や高等専門学校等では、講義に加え実験・実習をカリキュラムに取り入れていると思います。本WSでは、生命・化学系の実験・実習の授業設計における「到達目標」と「評価方法」の関係、さらに「安全管理」について参加者同士でのディスカッションを通して学びを深めました。一般的に、ディプロマポリシーに掲げる専門的知識や技術・技能の修得を「到達目標」として掲げていることが多いと思います。しかし、将来学生が実験・実習のTA、さらに教員など指導的な立場、後継者になることを考えると、「学生自身で安全に実施する力」を向上させ、「周りの危険を認識できる力」を育成する必要があると考えています。WS当日は、実験・実習を担当されている参加者ご自身の授業を振り返って頂き、安全に実施するために必要な事前指導の在り方や、到達目標に「安全に実験・実習を実施できる」等を入れた場合の評価方法等について事例を交え紹介させて頂きました。また、安全に実施する実験・実習の環境整備に関しては、実験・実習を担当する教員組織に加え、施設・設備を担当している職員の方との連携が必要です。環境整備の一例としてSOP(Standard Operating Procedure)の作成方法等を紹介させて頂きました。WS終了後、「安全性への配慮不足に気付かされた」「安全に実験する」を評価項目に入れたい」というコメントを頂きました。今後は、機械・電気系等の分野における実験・実習の授業設計WSも実施していきたいと考えております。WSからアイデアを得たいと考えている方は是非ご参加ください。

英語による
授業のためのWS

(2019年7月6日実施)

研修担当講師
教育イノベーション推進センター
FD・SD部門員

恒安 眞佐

(建築学部 建築学科)



この研修の目的は、(1)英語の活動案・授業案を作成できる、(2)英語による授業に自信を持つことです。(1)を達成するため、参加者の皆様に、いくつかの活動を体験してもらいました。研修の構成は、「自己紹介」「英語による授業の理論」「技法」「活動紹介」「活動案・授業案作成」「まとめ」でした。反省点は、自己紹介で時間を取りすぎてしまったことです。初めの雰囲気作りを大切にしようと思ったのですが、みなさんの話が弾み、予定時間を大幅に上回ってしまいました。その結果、各セッションも用意していたメッセージを伝えられず、各スライドも手薄になってしまいました。以後、時間配分に気をつけようと思います。

活動案や授業案を作成・共有する予定が、自分の時間配分不足のため、残念ながら数分の作業となってしまいましたが、「英語による授業に自信を持つこと」を達成するため、理解しやすい英語とコミュニケーションスキルを取り上げ、英語の多様化や柔軟な態度の重要性を強調しました。

参加者の皆様のご経験やご意見からも多くを学ばせていただきました。必要に応じて、担当される授業に本研修での知識や活動内容をアレンジして取り込んでいただければと思います。ご自分の英語力、柔軟性、そして多彩なコミュニケーションスキルを駆使し、自信を持って楽しんで授業実践して下さい幸いです。

2019年度 理工学共同利用拠点実施プログラム一覧

■教育能力開発プログラム

(1) 理工系教育に関わる教員の基礎的・共通的な能力開発

	内 容	日 程	人数
1	授業外学修を促すシラバスの書き方WS	2019/9・2020/2-3	30
2	授業デザインWS	2019/9・2020/2-3	30
3	学生主体の授業運営手法WS	2020/2-3	30
4	学生主体の授業運営手法WS実践編	2020/2-3	30
5	英語による授業のためのWS	2019/7	30
6	英語による授業のためのスキルアップ研修	2019年度後期	30
7	ルーブリック評価入門WS	2019/11	30
8	理工系レポートの課題設計と評価に関する研修	2019/10	30
9	ティーチングポートフォリオ作成・完成WS	2019年度前期・2019年度後期	10
10	LMS使用法入門(学内のみ)	随時	(学内のみ)
11	障がい学生への対応(学内のみ)	2019/4	(学内のみ)

(2) 理工系教育の強みをさらに伸ばす能力開発

	内 容	日 程	人数
1	研究室指導に必要なコーチング技能入門WS	2019/7	30
2	実験・実習の授業設計入門WS	2019年度前期	30
3	体系的なプロジェクトマネジメントを活用した授業設計入門	2019年度後期	30
4	デザイン能力を育成する授業設計入門WS	2019/11	30
5	反転授業入門WS	2019/6	30
6	グローバルPBLの新規設計と運営のノウハウ	2019/12	30
7	グローバルPBL参加	随時	若干名
8	SCOT研修へのオブザーバー参加	2019年度前期・2019年度後期	若干名

■研究能力開発プログラム

	内 容	日 程	人数
1	研究内容を分かりやすい言葉で伝えるためのWS	2019年度後期	30
2	教育成果を可視化するための統計手法入門	2019年度後期	30
3	高等教育開発セミナー	2019/5	30
4	外部資金獲得支援(学内のみ)	2019/9-10	(学内のみ)
5	研究者倫理について理解する研修(学内のみ)	2019年度後期	(学内のみ)

■マネジメント能力開発プログラム

	内 容	日 程	人数
1	産学連携の知的財産マネジメントについて理解する研修	2019/10	30
2	大学におけるダイバーシティについて理解する研修	2019年度後期	30
3	アカデミックポートフォリオ作成・完成WS	2019年度前期・2019年度後期	各2名以内
4	FDer & SDC養成講座	2019/10(愛媛大学と共催)	30
5	カリキュラムコーディネーター養成講座	2019/5(日本高等教育開発協会と共催)	50
6	安全衛生・危機管理に関する研修(学内のみ)	年数回	(学内のみ)

研修の実施情報は

「理工学教育共同利用拠点」ご案内メールリストでご案内しています。
ぜひ、ご登録ください。

登録URL <https://goo.gl/WQk8iF>

